

越谷駅前に28階建てのマンションが建築されている。そのため道が変わっているのに注意。



日光道中は三叉路を左に入る。歩道のない狭い道で交通量が多い。

三ノ宮卯之助
文化4年(1807)岩槻藩領三野宮村(越谷市三野宮)で生まれ、桶川稲荷神社で大盤石(610kg)を持ち上げ日本一となる。力持ち番付で東大関に。持ち上げた力石はいろんな地域で合計38個。

東武鉄道越谷駅
開設時は現在の「北越谷駅」が「越谷駅」と呼ばれていましたが、「町の発展と産業の振興のために、中心部に駅を」という町民の熱心な誘致運動から、駅が開設され命名されました。地名の「こし」は腰とも書かれ、山や丘の麓をさし、「や」は谷で湿地などの低い土地をさします。



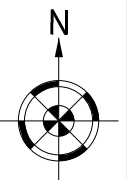
越谷駅へ

武蔵野線
東日本旅客鉄道の線路名称。鶴見～府中本町～西浦和～新松戸～西船橋間100.6km、西浦和～野間4.9kmよりなる。全線複線、直流電化。東京に放射状に集中する幹線鉄道を相互に結ぶ東京外環状線で、当初は従来山手貨物線を利用していた幹線相互連絡の貨物列車をバイパスさせる目的で建設された。昭和48～53年(1973～78)日本国有鉄道路線として開業し、既設の鶴見新鶴見操車場をあわせて、東海道、中央、東北、常磐、総武各線と結び、東京周辺をほぼ4分の3周する鉄道が完成して東京付近の貨物列車の運行体系を大きく変えた。日本でもっとも近代化された武蔵野操車場(吉川)から三郷間や流通ターミナルと結び付く計画で設けられた樫ヶ谷、新座、越谷の三つの貨物ターミナルがあって、その機能の発揮が期待されたが、鉄道貨物の全国的退潮のなかで武蔵野操車場は廃止され、武蔵野線も貨物本位の鉄道からしだいに旅客輸送を重視した鉄道に変化した。鶴見～府中本町間は既設の南武線とほぼ並行するため、貨物列車のみが運転され、新松戸～西船橋間は旅客営業のみとなっている。電車列車は府中本町～西船橋間、京葉線経由で東京駅に直通運転される。昭和62年(1987)、国鉄の分割民営化に伴い、東日本旅客鉄道に所属。平成2年(1990)京葉線への直通運転が開始され、電車は西船橋から東京、南船橋に乗り入れる。

大聖寺(大相模不動)
天平勝宝2年(750)の創建と伝えられています。ここ大相模不動尊は関東三大不動の一つとも称されていた有名な寺でした。徳川家康も鷹狩のときには大聖寺への宿泊を重ねていたといわれ、寝衣などが保存されています。徳川家康が関が原の戦いにあたり、大相模不動尊で祈願をし、出陣したことわれています。元荒川沿いに、東へ1.6kmほど行くと「大さがみぶどう」、「...御朱印高六拾石、真言宗大聖寺。1.大聖寺境内、権現様御宮有之。1.大聖寺境内不動有之、字大相模といふ。江戸近在より人多く参り、常にも繁昌なり。」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)

越谷市内へ入る分岐点にある。植木に埋もれている場合があるので注意。

御貸付金受取証文の碑が建っている。これは、瓦葺根村名主中村彦左衛門や浅草福富町池田屋宗輔らによって建てられたもので父中村彦左衛門の意志を継いで文政9年(1826)に百両を凶作の時の貯えとして御貸付金に組み入れたが天保7年(1836)の凶作に下げわたしを願い、困窮人を救った旨が刻まれている。ほかに寛文5年(1665)の御手洗石などがある。そのそばには力石が置かれている。



14 草加宿～越ヶ谷宿
埼玉県越谷市
新越谷～越ヶ谷宿
(歩行距離 1616m 19分)
歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp

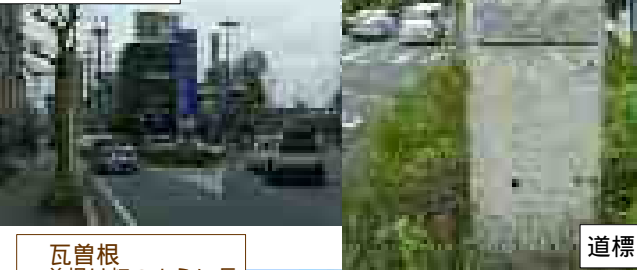
3 越ヶ谷宿

越ヶ谷宿は江戸時代に整備された宿場町の一つで、日光街道の江戸・日本橋から数えて3番目の宿場である。既に鎌倉時代頃には六斎市の立つ町として栄えていた記述があり、猿島街道、赤山街道が東西南北に貫通する交通の要衝でもあった。江戸幕府の成立後すぐに日光街道の宿場に取立てられ、正式な宿場となった。「瓦葺根村境より大房村境迄宿往還長八町四拾八間、但、大沢町共」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)、また元荒川の対岸である大沢村も町場化し、越ヶ谷の伝馬上の助合村として大沢宿が成立している。越ヶ谷と大沢の二つの町を合わせた範囲が越ヶ谷宿といわれるようになり、その規模は千住宿に次ぐ規模となった。

宿場の範囲は現在の越谷市越ヶ谷から元荒川を渡り、同市大沢に至る範囲である。古くから栄えていた越ヶ谷側は旅籠よりも商家の比率が高いのに対し、大沢側は純粋な宿場の形態を持っており、本陣・脇本陣も大沢側に置かれていた。宿内家数1005軒、大沢側の本陣(福井家)1、脇本陣2(山崎家と深野家)、うち、本陣付御用旅籠(脇本陣と同格の格式をもった幕府指定の旅籠の事)が16軒で、当宿の重要性が良く分かる。旅籠大小52軒、人口4,603人(男2,272人、女2,331人)であった。駄賃・賃銭 荷物1駄・乗掛荷人共121文、軽尻馬1疋77文、人足1人58文。

明治7年(1874)、明治32年(1899)の大火で町のほとんどを焼失。また、区画整理や道路の拡幅工事で敷地も細分化された。

瓦葺根三叉路 植木の中に道標



道標

瓦葺根
葺根は畑のように長く伸びた高まりを意味し、自然堤防の高まりにつけられる。瓦葺根は、昔は川原葺根とも書かれ、元荒川の河原の砂地からきた地名。そして、「川原」がいつのまにか「瓦」という字になった。また、ここは紀州藩の鷹狩りの地であった。

照蓮院
瓦葺根秋山家の祖は、甲斐国武田家の重臣秋山伯耆守信隆であることを伝えている。天正10年(1582)武田家滅亡のとき、信隆とその二男長慶は武田勝頼の遺児千徳丸を奉じて瓦葺根村におちのび潜居したが、千徳丸は間もなく病死した。長慶はこれを悲しみ、瓦葺根村照蓮院の住職となってその菩提を弔り、寛永14年(1637)秋山家墓所に五輪塔による供養墓石を造塔した。これには「御湯殿山千徳丸」と刻まれている。

なお、瓦葺根村に潜居した信隆は、家康に仕え小金領(現在の松戸市)1,000石を知行した長男虎康の子昌秀のもとに引き取られましたが、この昌秀の妹が家康の愛妾「おつまの方」です。おつまの方は家康の5男、水戸15石に封ぜられた武田信吉の生母でしたが、天正19年(1591)24歳の小金で病没した。また、武田信吉も慶長8年(1603)嗣子をなくして水戸で病没し、この家は断絶した。千徳丸の供養墓石は、これら戦国期のさまざまな由緒を秘めた史跡の一つともいえる。



照蓮院